

(熊毛郡中種子町納棺坂元大園)

位置と環境

遺跡は種子島西海岸のほぼ中央部にあたる浜津脇港から東側台地に上り詰めた標高約30mの台地に位置する。台地は広範囲に広がる。

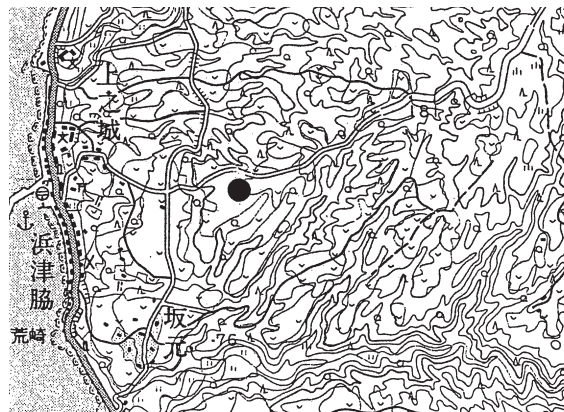
調査の経緯

調査は昭和54年2月20日～3月5日にかけて県教育委員会が県営畑地総合土地改良工事に伴って、本調査を実施した。大園遺跡はA地点、C地点はB地点(1,500㎡)は設計変更によって現地保存となった。調査面積は1,800㎡である。

遺構と遺物

調査の結果、縄文時代前期・後期・晩期、弥生前期・中期、中世の複合遺跡であるが、縄文晩期と中世が主体となる。

縄文時代の遺構には、縄文時代後期の竪穴状遺構3基と貯蔵穴1基が発見された。竪穴状遺構はいずれも遺構の上部は耕作等によって削平され、保存状態は劣悪であるが、略円形で約120～200cm前後の規模で、深さは約6～12cm前後である。竪穴状遺構は床面はフラットでピットも存在することから住居が想定されるが大半が削平を受けていることから詳細は不明であり検討を要する。遺構内からは遺物は出土しないが、埋土や周辺からの遺物の出土状況から縄文晩期に比定されよう。貯蔵穴は径約120cmで深さは約50cmである。遺構内からは縄文後期の指宿式土器の鉢やバリバリノキやハマビワの炭化物が出土した。遺物には、縄文後期の市来式土器や丸尾タイプ、一湊式土器をはじめ、晩期の黒川式土器の甕形土器、鉢形土器、孔列文土器、組織痕文土器が出土した。中でも(第2図13)は朱塗りの研磨土器で小型の広口鉢形土器である。胴部以下は欠損しているが、胴部下位に浅い段を有し、胴部は丸く張り出し、頸部で締め口縁部は外反する。口唇部には片リボンの突起が施され、口径14.6cm、は胴部径は16.7cm、復元器高は約8cmである。文様は頸部に沈線文、胴部には長楕円文とU字文・V字文を沈線文で施文する。大洞c系土器で貴重な土器である。



第1図 大園遺跡の位置

石器には、磨製・打製石斧、磨石、叩石、礫器などがある。量的には凹石、叩石、磨石が過半数を占め、次に多いのが打製石斧で石器全体の26%にあたる。

また、弥生としては前期後葉のL字口縁の甕形土器や中期の甕形土器等が出土した。

中世の遺構としては、保存状態が良好な掘立柱建物跡4棟が検出された。特に1号掘立柱建物跡は2間×2間で、西に庇を持つ総柱の建物である。柱穴も比較的大きく、深く充実したものである。これらに伴う遺物には14～15世紀の青磁の碗、坏、稜花皿、玉縁口縁の白磁、染付け、備前焼の播鉢等が出土した。

特徴

特に注目される遺物として、大洞c系の小型広口鉢形土器や組織痕土器がある。これまで九州島外での発見例は無く、種子島までその分布が広がることとなった。

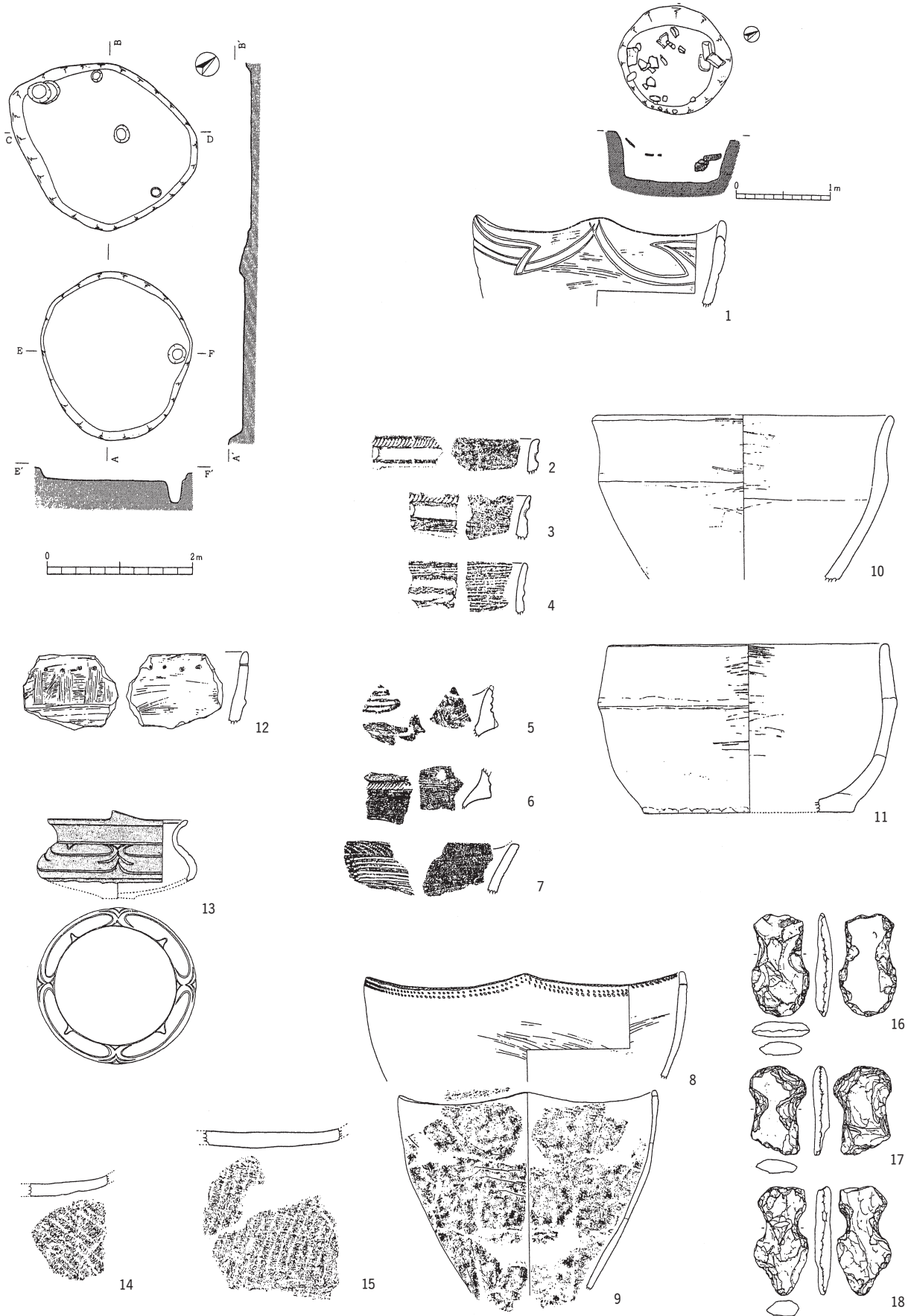
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1999「柿内遺跡・大園遺跡・西俣遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』24

(青崎和憲)



第2図 出土遺物